アメリカ革命の問題点

本　田　創　造

I 問題の設定

わが国の歴史学界にみられる最近の動向のひとつは，ロシヤ史以外の研究分野においても，ソヴェト歴史学の成果にたいする関心が漸くあらわれはじめたことである。その最もはなばなしい1例として，われわれは，世界史における日本の近代化，とりわけ明治維新の歴史的性格をめぐるソヴェトの歴史家とわが国の歴史家とのあいだの周知の論争，ないしはこの論争に端を発しそれを軸として現在わが国の歴史家たちのあいだで広汎に繰りひろげられている明治維新論争をあげることが出来る[1]。現在の時点で明治維新論争がこのようなかたちで展開されるに至った背後には，もちろん，それを可能にした特殊条件なかんずくわが国斯界における封建論争以来の学問的伝統，ならびにこの問題をめぐる係争点の帰結が大なり小なり現代日本の歴史的課題の解決のしかたと結びついており，そういう意味での実践的意義を今なおもちつづけているということを見逃すことは出来ないであろうが，他方ソヴェトにおける『世界史』の編纂・刊行[2]を中心とし，その理論的基礎としてかの国における大がかりな討議を経て最近になってほぼ統一的に確立されつつあるかにみえるソヴェト歴史学の歴史理論，たとえば世界史の時代区分観などが，その受けとめかたはともかく，わが国の歴史研究者の関心をかきたてずにはおかぬという一般的事情があったからである。このような意味において，ソヴェト歴史学のわが国の歴史研究者にたいするインパクトは必ずしも日本史の領域に限定されることなく普遍的であり，わが国のアメリカ史研究者にとっても決して無縁ではありえない筈である。

ところで，ひるがえってわが国におけるアメリカ史研究の現況はどうかといえば，イギリス史，フランス史などその他の国々にかんする歴史研究にくらべて比較的幼稚な段階にあると屢々指摘されてきたこれまでの後進性はほぼ克服されて，ここ数年来とみに著しい進歩のあとをみせている。とくに最近では，いわゆる社会経済史家とよばれる研究者たちの積極的参加をえて，歴史的事件の基底にある基礎過程の分析が相次いで行われ，それとともに根本資料にさかのぼることがわが国のアメリカ史研究者にも第一義的重要性をもって要求されるようになった[3]。1956年に開かれた日本西洋史学会第7回大会がその近代史部会での共通テーマに市民革命の問題をとりあげ，その際イギリス史，フランス史，ドイツ史，ロシヤ史とならんでアメリカ史部会がもたれたことは，わが国のアメリカ史研究の発展段階に1時期を劃したが，その後今日に至るまで広く世に問われてきた数多くの実証的個別研究はかつてのアメリカ史研究にみられた後進性がすでに克服されつつあることを示している。こうして研究の後進性を克服するた

---

1) 例えばП・トペハ「明治絶対主義論への批判」『歴史学研究』247号，遠山茂樹「明治維新=ブルジョア革命論について」同上誌249号，永原慶二「社会発展史をめぐる日本史学とソビェト史学との断層」『思想』440号。最近の『歴史学研究』をはじめとする歴史研究誌には枚挙にいとまないほど多くの関係論文が掲載されている。尚，本年度の歴史学研究会大会がその大会テーマに「世界史における日本の近代」をとりあげたことは周知のことであろう。

2) Академия Наук СССР, Всемирная история. すでに3分の2ほど刊行された全10巻予定の本書は，わが国においてもその飜訳が進められ，すでに古代，近代各数分冊が出版されている。

めの努力が「当然にふむべき道すじにしたがって」[4]着実に実行に移されているとき，それ故にこそ，われわれは，また，同時にそれぞれの実証的個別研究の成果を十分にふまたえうえで，それらの個別研究が包摂ないしは相互に有機的に関連せしめられるより大きな歴史的諸事件のもつ全体的な歴史像を照し出し，その全歴史過程における意義を明確にするとともに，さらにはそれらの諸事件を貫流する歴史の基本的な流れを理論的に追求することに注意を払う必要がある。研究の専門分化とそれにともなう精緻な実証的研究の深化は，むしろそのような歴史研究への道程だからである。また，これを逆に言えば，このような視角を欠いた個別研究は，それが如何に精緻なものであっても，それ自体歴史的意義を失うおそれがある。

このような観点にたつとき，個別的実証の点では未だ十分の成果をあげているとは思われぬソヴェトにおけるアメリカ史研究も，われわれ日本のアメリカ史研究者にとって無視出来ない存在となりつつあるように思われる。だが，残念なことに，ソヴェトにおけるアメリカ史研究は現在までのところ殆んどわれわれの前に紹介もされないでいるというのが現状である。本稿はソヴェトにおけるアメリカ史研究の全般的情況を伝えることを直接目的とするものではないが，以上のような経緯にかんがみ，従来われわれが共有財産としてもつことが出来た内外(主として日本とアメリカ)のアメリカ史研究を前提とし，その成果のうえにたって多少これにソヴェト歴史学のこの分野における最近の研究を加味して，わが国において最もやかましく論議がかわされてきたテーマのひとつであるアメリカ革命の問題を対象にし，主としてこの革命の性格規定(当然に原因論にも関連する)にかんする若干の問題点を考察することを企図したものである。

II　ソヴェトにおける アメリカ史研究とアメリカ革命

すでに前節において示唆したように，ごく限られた私の視野を通してみる限り[5]，ソヴェトにおけるアメリカ史研究の成果は現在までのところ決して十分であるとはいいがたい。むしろ，その研究は，最近になって漸く本格的に開始されたばかりといった感じである。事実，さきに触れた『世界史』のなかで「北アメリカにおけるイギリス植民地の独立戦争。アメリカ合衆国の形成[6]」の章を執筆している歴史学博士候補同時に上級学術研究員であるザハロワ M. Захарова 女史も，「ソヴェトにおけるアメリカ史研究は未だ日浅くして若いが，わが国のアメリカ史家たちはすでに立派に研究を開始しており，合衆国の歴史の一層進んだ研究を行うための可能性を開きつつある[7]」と謙遜のうちにも将来への自信のほどを示している。

ここで《Вопросы истории》，《Новая и новейшая история》その他折にふれて私の眼にとまった若干の書物——いちいち列挙しないが——によって，この段階におけるソヴェトのアメリカ史研究の趨勢を一瞥すると，そこにはやたりソヴェト的特徴ともいえる研究方法を，数少ない研究者と限られた研究成果のなかにも，明瞭によみとることが出来るのである。すなわち，まず気がつくことは，きわめて当然なこととともいえるが，その出発点が従来とくにアメリカにおいてなされてきたブルジョア的なアメリカ史叙述にたいする批判におかれ，したがってこれまでアメリカの歴史家たちによって科学的という名のもとに屢々《無視》ないしは《歪曲》されてきたといわれるアメリカ史上の重要問題が重点的かつ系統的にとりあげられているということである。すなわち《もうひとつのアメリカ》の再発見であり，その視点に立脚した《歴史の書きかえ》である。そのもっとも端的なあらわれとして，アメリカ史における黒人の歴史的

3，4)　中村勝己「アメリカ社会経済史研究」(弘文堂刊『社会経済史大系』第10巻。)

5)　単行本を除いて，雑誌論文では，主として《Вопросы истории》『歴史の諸問題』，《Новая и новейшая история》『近代・現代史』に掲載される諸論文が日常私が接しうるものである。

6，7)　原書第5巻，日本版『世界史』近代3，第21章。本章の飜訳を私が担当したことからザハロワ女史と文通する機会をえた。これは，私がアメリカ革命にかんする2，3の問題について同女史の意見を求めたとき，その返事のなかに書かれていた言葉である。

役割を正当に再評価しようとする強い志向がみうけられる。たとえば，1958年にはReconstruction期における黒人の土地と自由にたいする闘争をとり扱った書物がイワノフP. Ф. Иванов によって書かれており[8]，昨年の《Новая и новейшая история》の第5号にはさきのЗахарова が John Brown の峰起とこれをめぐるブルジョア史家の見解を批判した論文を書いている[9]。(因みに Philip S. Foner, ed., *The Life and Writings of Frederick Douglass* 全4巻や W. Z. Foster, *The Negro People in the American History* がいちはやくソヴェトで飜訳出版されていることもこの間の事情を反映しているように思われる。)これと並んでアメリカ人民の民主主義運動や労働運動にかんするもの，Paine, Jefferson, Washington などのアメリカ民主主義の父祖たちの思想，また人民の権利擁護にかんするものなどが散見されるが，歴史上の事件としてはアメリカ革命と南北戦争をめぐる諸問題により多くの関心が払われている感がある。その場合，これら諸対象への接近のしかたは，すぐれて社会・政治史的かつ理論的であって，それらの底に横たわる基礎過程の個別的実証研究は殆んどみうけられない。以上述べてきたことのなかにソヴェトにおけるアメリカ史研究の後進性を見出し，それを云云することは容易であろうが，しかし同じ後進性といっても，数年前のわが国の場合と比較してみると，そのあらわれかたの著しい相違に思い当るのである。

つぎに気づくことは，やや形式的なことと思われるむきもあろうが，論文や書物の題名，またそのなかの章，節などの見出しのつけかたが，その内容や問題にたいする著者の見解，アプローチのしかたを端的に表現していることが多いことである。このことは，しかし単なる形式上のことがらではなく，問題としてとりあげたひとつひとつについて与えられた一定の資料的条件のなかで——それはつねに絶対的に十分であるということはありえない——その条件を絶えず豊かにする努力を払うとともに，それなりに可能な歴史的規定性をつねに明確にしてゆくという基本的な研究態度のあらわれである。いわゆる歴史の《複合性》Complexity というかくれみのなかに，その本質規定があいまいにされてしまうような態度は殆んどみうけられない。したがって，われわれの眼には，それが屢々実証的裏付の稀薄な定式化あるいは性急な公式主義や劃一化として映ることがある。しかし，その場合にも，背後にソヴェト歴史学の歴史観が控えていて，世界史の普遍的法則性がアメリカ史の個々の歴史的諸事件のなかを如何に貫徹しているかという視角が堅持されている。

このような一般的情況のなかで，アメリカ革命はソヴェトの歴史家たちによって，どのように把握されているであろうか。この場合にも，すでに推測されるように，その本質的な性格規定においてアメリカやわが国などでみうけられるような意見の多様性，見解の根本的対立といったものは殆んどみうけられない。そういう意味では，おしなべて画一的な定式化の感を免れない。その共通的な特徴的見解は，次の3点に要約出来る[10]。

第1は，この革命のもつ《反封建的・ブルジョア的性格》の強調である。イギリス本国が植民地に移入した免役地代 quit-rent その他土地所有における封建的諸要素はこの革命によって廃棄された。アメリカ植民地の革命戦争はブルジョア革命であって，それはフランスの場合と同様，その指導者はブルジョアジーだったが，この闘争を本国からの決定的な分離にまでおしすすめ，戦争を勝利させた原動力は人民——すなわち，数多くの農民，都市の小ブルジョアジー，労働者，年期奉公人，黒人奴隷など——であった。

8) Р. Ф. Иванов, Борьба негров за землю и свободу на Юге США, 1958.

9) М. Захарова,“ Востание Джона Брауна и американская историография”.

10) すでに触れた『世界史』のなかのザハロワの叙述のほかに，最近同じ科学アカデミーから全2冊で出版された『アメリカ史概説』Очерки новой и новейшеи истории США のなかの A. A. フルセンコによるアメリカ革命の叙述，さらに同氏が別個に1冊の書物にまとめた『アメリカ革命』A. A. Фурсенко, Американская буржуазная революция, 1960. を中心にまとめた。ほかに Академия Наук СССР, Новая история, 1953. А. В. Ефимов, Очерки истории США, 1958. も参照した。

第2は，この革命のもつ《反植民地的性格》の強調である。それはアメリカを圧迫して植民地奴隷の状態におとしいれていたイギリスの強盗どもにたいするアメリカ人民の戦争，すなわち《正義の戦争》(レーニン)であり彼等の革命的伝統がこの戦争と結びついていたのである。しかも，それは歴史上，最初の成功した植民地革命であった。

このことから，第3に，この革命の《民族解放的性格》が強調される。すなわち，反植民地的革命は同時に民族解放闘争である。1775-83年の革命戦争の進歩的意義は，アメリカ人民が植民地的圧迫から自らを解放し，独立の国民国家を形成し，北アメリカの生産力と独自の文化を発展させることを妨げていた鉄鎖を断ち切ったことにある。こうして，アメリカ人民は全世界にさきがけて，新大陸の広大な地域に連邦共和政にもとずいた民主国家をつくりあげた。そして，さきのЗахарова女史は言う。「これら3つの規定(ブルジョア的，反植民地的，民族解放的)が十分にこの革命の本質を性格ずけるのであって，なにか1語でそれを表現するようなことは出来ない」のだと。以上のことから，この革命のもつ強い民主主義的内容，またそれが単にアメリカ合衆国にたいしてばかりでなく全世界の歴史的発展にたいしてもつ世界史的意義が強調される。それは世界資本主義発展の道標であり，《ヨーロッパのブルジョアジーにたいする警鐘》(マルクス)であり，その後の西半球におけるラテン・アメリカ諸国のスペイン，ポルトガルなどにたいする革命運動ののろしであった。

III　いわゆる《内部革命》の問題

ここでソヴェトの歴史家たちのアメリカ革命観をこれ以上述べる必要はない。みられるように，そこには，アメリカにおいては勿論，わが国においても近時アメリカ革命の専門家たちによってやかましく論じられはじめた，アメリカ革命がいわゆる《内部革命》internal revolution であったか否かといったような問題設定はみうけられない。いうまでもなく，このような問題設定ならびにそれをめぐるアメリカ革命論の展開は，そのこと自体，研究史的にみてきわめて重要な意味をもっている。というのは，そこに到達するまでには『社会運動としてのアメリカ革命[11]』を包括的に提起した J. F. Jameson の克服というかたちで——しかし実際には彼の積極面を発展させるよりはそれを否定もしくは歪曲することによって後退している場合が多い——それ以後の数々の地方史研究の個別的実証的成果が横たわっているからである。

さらに，時代をさかのぼって，C. M. Andrews, G.L. Beer, C.H.Van Tyne 等のいわゆ《帝国学派》the imperial school of colonial period によってアメリカ革命の憲法的・政治的解釈が科学的な歴史研究として確立されて以来，L. M. Hacker, C. H. Beard などの経済的解釈を含む今日に至るまでのアメリカ革命史研究の沿革については，今津晃氏のすぐれた論評があるのでそれに譲るとして[12]，そのような背景のなかから浮び上ってきた最近の内部革命論争とその諸相は，しかし必ずしもアメリカ革命の全体像を正しく描き出す方向において論議されているようには思われない。問題は，早くも今世紀の初頭に C. H. Lincoln[13]が，つづいてより明確には Carl Becker[14]が指摘したアメリカ革命のもつ闘争の二重性——植民地の自治および独立のたたかいとアメリカの政治および社会の民主化のたたかい——をどのように統一するかということである。この場合，革命原因のとらえかたが必然的にアメリカ革命そのもののとらえかたに関係してくることは研究史に照すまでもなく当然であるが，今日の研究史的段階においては革命の根本原因——というのは *The Causes of the Amrican Revolution* の編者の John. C. Wahlke もその序文で指摘しているように，もはやアメリカ革命の原因が複合的で根深いものである

11) John Franklin Jameson, *The American Revolvtion Considered as a Social Movement*, 1926. 本書は，最近，久保芳和氏によって『アメリカ革命』と題して訳出された。

12) 今津晃「アメリカ革命の歴史」『史林』第42巻第2号。氏が最近世に問われた大著『アメリカ革命序説』にも殆んどそのまま収録されている。

13) Charles H. Lincoln, *Revolutionary Movement in Pennsylvania, 1770-1766*, 1901.

14) Carl Becker, *The History of Political Parties in the Province of New York, 1770-1766*, 1909.

ことに疑問を呈する者は1人もいない。なにをより基本的とみるかによって見解がわかれる——をどこにおくにせよ，アメリカ革命のなかに“an inter-imperial struggle”と同時に“an intra-colonial struggle”をあわせみとめることなしには対象に接近することは出来ない。

後者の存在をみとめることは，アメリカ革命把握のためのいわば必須条件ともいうべきもので，さきのソヴェトの歴史家たちによる革命の性格づけも当然にそれを不可欠の前提としてふまえたうえでの定式化であることは，かれらの行論の随所にうかがうことが出来る。とはいえ，アメリカ植民地における内部革命の歴史具体的な存在形態は，植民地時代から革命時代を通じての各地域もしくは植民地各邦におけるブルジョア的発展の程度，またそのときどきの諸階級間の現実の力関係によってニュアンスを異にし，決して千篇一律に論じることが出来ないことはいうまでもない。以上のような観点にたつとき，さきにもふれたようにアメリカ革命が内部革命であったか否かといったいわば二者選一的なアメリカ革命論の展開は，そもそも最初に Becker が提起した命題の正しい発展方向から遙かに逸脱しているように思われる。すなわち，今日，このようなかたちで展開されている内部革命論争は，一方の極には Robert E. Brown に代表されるように[15]，内部革命の存在そのものを否定し，アメリカ革命をすでに存在していた植民地内の民主的秩序を保持するためのイギリスとのたたかいとしてとらえることによって完全にその革命性を抹殺した保守的見解を生みだしたが，同時に他の極においては当の Brown が直接の攻撃対象にした Merril Jensen のように[16]，内部革命の存在とその成功を強調するあまり，その論旨に含まれる多くの建設的見解にもかかわらず，独立行為をもすべて急進派による内部革命の遂行ということのなかに解消してしまうような一面的理解を生みだす結果になっているからである。アメリカ革命において内部革命の問題は，あくまでも楯の半面であって，あとの半面は民族的独立である。

H. M. Morais は，つぎのように述べている。「第1次アメリカ革命は2つの一般的運動——すなわち，自治および民族的独立のたたかいと，より民主的な秩序をもとめたアメリカ人どうしのたたかい——の産物である。したがって，この革命はイギリスにたいする解放戦争という対外的側面と反民主的な人々に反対する大衆蜂起という対内的側面とをもったのである。……[17]」これは W. Z. Foster の“a bourgeois revolution, with strong democratic currents within it”[18]という簡潔な規定とも基本的に見解を同じうする。さらに，最近，『アメリカ革命論』を世に問うた Herbert Apther は，この点に関して「アメリカ革命は相互に浸透する3つの流れの結果である」と述べて，1)植民帝国イギリスの支配層とその植民地であったアメリカの大多数の人々との利害対立，2)植民地内部の階級分化とその結果としての階級闘争，3)階級を越えたアメリカ人としての民族性とそれに根ざす民族意識の高まり，をあげている[19]。

すなわち，アメリカ革命の基本目的は，重商主義イギリスの植民地支配に抗して民族的独立をかちとること，植民地における生産力のより以上の発展の妨げとなっていた主として土地所有における封建的諸要素をとりのぞくこと，この2つをめざしたブルジョア民主主義革命であった。

このように言うとき，かつて私が今津晃氏の「アメリカ革命と邦憲法——ペンシルヴェニア革新憲法の成立と崩壊——」(『歴史評論』63号)という論文を論評した際，アメリカ革命の基本的性格をめぐって2人の間で問題になった係争点が，氏が最近『アメリカ革命序説』と題する大著——氏のこれまでの研究の集大成であるとともに，わが国における数少い最もすぐれたアメリカ革命論の

15) Robert E. Brown, *Middle-Class Democracy and the Revolution in Massachusetts, 1760–1780*, 1955.

16) Merril Jensen, *The Articles of Confederation*, 1940.

17) Herbert M. Morais, *The struggle for American Freedom*, 1944.

18) William Z. Foster, *Outline Political History of the Americas*. 1951.

19) Herbert Aptheker, *The American Revolution, 1763–1783*. 1960.

ひとつである——を公にされた今日においても，依然として尾をひいていることに気がつく。すなわち，誤解をおそれずに以上の行論との関連においてあえて図式的な表現で氏にたいする疑問を呈すれば，Jensen がアメリカ革命の二重性を急進派による内部革命の遂行というかたちでとらえることによってその民族独立的契機を実質上解消してしまったように，今津氏にあってはその急進派を愛国保守派という語でおきかえることによって《内部革命》を強調されるあまり，その独立的側面を認められながらも，やはり同様の——といって言いすぎであるならば，それを過少評価する結果に陥っているのではなかろうかということである。「植民地社会自体内の緊張をみないではアメリカ革命の背景はとても十分に捉えられないという確信」，そしてそれを 1773 年以後の時期に突如として起ったものでなく史的連続性において発展的にとらえなければならないとして「革命は一夜にして起ったのではなく，植民地時代をつらぬく政治的・社会的諸力の一大結集としてもたらされたものである」と強く主張される今津氏の提言は，それ自体としてきわめて正当であるが，「こうしてアメリカ革命は植民地時代からの社会運動の連続的発展であり，或る領域では既成事実の再確認にほかならず，」また「すでに形骸化していた植民地規制や封建遺性の廃棄の事後確認に終った」(傍点は今津氏) と言われるとき[20]，植民地時代以降の氏のいわゆる《社会運動》が即《アメリカ革命》(傍点は本田) と等置されているのではないかとの疑問を抱くのはひとり私のみであろうか。アメリカ革命はアメリカ発展史上のひとつのそれ自体相対的に自立した独自の歴史過程である。それはベーコンの反乱の単なる(量的な)延長でもなければ，またそれがそのままジャクソニヤン・デモクラシーに無媒介に受けつがるべきものではない。それは社会運動一般ではなく，明確に権力問題をめぐる革命であった筈である。(今津氏は《内部革命》という語と同時に《内部抗争》という語を併用しておられる！) そういう意味で，そこにはアメリカ革命をアメリカ革命たらしめた独自の歴史的内容がある。植民地独立，民族解放はその中心的な要のひとつである。そしてこのことは問題を史的連続性においてとらえるということと少しも矛盾しないのである。

20) 今津晃『アメリカ革命序説』，1960 年。

IV　ブルジョア革命と民主主義

アメリカ革命における民族解放的側面をこのように強調したからといって，しかしそのことによって私がこの革命のもつもうひとつの側面を過少評価していいと考えているのではないということは，以上の行論からもすでに自ら明らかなところであろう。いな，むしろ現在の内外の研究情況をふりかえってみるとき，アメリカ革命のもつ対内的民主化過程——その民主主義的性格は，より一層高く評価されて然るべきである。というのは，Aptheker がさきに触れた書物(『アメリカ革命論』) を次のような言葉をもって書きださねばならないような今日的情況が現実に存在しているからである。すなわち，彼は言う。「最近のアメリカ史叙述にみられる著しい傾向は，アメリカ革命にかんするかぎり，それは決して《革命》などというようなものではなく，また，たとえ《革命》であったとしても保守的な革命であったから，その意味で全くユニークなものとして論じられていることである。このような解釈は，目あたらしいものではないが，第 2 次世界大戦後の合衆国においてきわめて重要なイデオロギー上の現象となっている《新しい保守主義》New Conservatism の一般類型の一翼を，はっきりと担うものである[21]。」彼の指摘によれば，この《保守的な修正主義》Conservative Revisionism は，1 世紀も前の De Toqueville の見解——アメリカ合衆国は一度も民主主義革命をもつことなく民主的であった——と本質的に同じである。(さきの Robet E. Brown の見解——アメリカ革命において，アメリカはすでに存在していた植民地の民主的自由を守るためにたたかったのであり，したがってアメリカ革命の父祖たちが求めたものは《変革》change ではなくて《安定》stability であった——を想い起せ！)

このような見方は，しかしひとりアメリカだけのものではない。社会構成史的把握が支配的なわ

21) Aptheker, *op,. cit.*

が国においても，アメリカ革命のもつ市民革命的性格を否定して，これを《上からの地主的改革》としてとらえ[22]，その結果この革命における人民大衆の歴史的役割を過少評価ないしは無視しようとする傾きがある。

ところで，小原敬士教授は，いわゆる大塚史学理論のアメリカ史における適用の批判を主眼にして，最近きわめて意欲的な論文を2つ書かれているが[23]，以上のような情況を念頭においてその論旨をふりかえってみると，そこで教授が強く主張される「市民革命としての性格をあまりにも理念型的に考えるあまりその民主主義的性質を過大に評価するようなことがあってはならない」といわれる提言は，それ自体としてはよく了解出来，かつ示唆するところもきわめて大きいのであるが，私としては，全面的には直ちに同意しかねる若干の疑問にぶつかるのである。

本論文の主題との関連において，ここでは2つのことを私なりにとりあげて教授のお教えをえたいと思う。第1の疑問点は，教授は「〈所得革命〉，〈株式保有の分散と民主化〉，〈新中間層の出現〉などに関連してあらわれて，〈経済の民主化〉economic democratisation をアメリカの現代資本主義のすぐれた特徴，新しい様相として強調する」F. M. Stern や M, Salvodori などの《階級なき社会》論者や《自由の経済学》者たちと「マルクスやマックス・ウェーバー史学方法論の上にたつ進歩的歴史学者」とをすべてひとまとめにして，教授が名づけられた《経済民主化論者》democratisationist という範ちゅうにおしこみ，そのアメリカ革命観が，——じつは教授は単にアメリカ革命のみならず，もっと幅広くアメリカ資本主義の歴史的発展過程において問題を取扱っておられるのではあるが——民主化過程の過大評価におちいっている点で同じであると断じられる。だが，果して，そうだろうか。私は大塚史学の立場からこれにこたえる任にはないが，少くともマルクス主義的な立場にたつ歴史家において，教授のこの批判は必ずしも正鵠をえているようには思われない。ということは，彼らがアメリカ革命における民主化過程の意義を認めていないということでは勿論ない。いな，むしろ民主化過程の意義なかんずくそこにおける人民大衆の歴史的役割を強調し，それをもっとも高く評価する点で，彼らは他の追随をゆるさない。そのことは，ここで新らたな引用をまつまでもなく，すでに本論中に触れた2，3の人々の言葉のなかからも明瞭によみとることが出来る。だが，同時に，この革命のブルジョア的限界を指摘する点でも，彼らほどはっきりそれを言うものはまた類がないのである。教授が《ゆきすぎたdemcratsation》の典型として引用された Salvadori や Stern のように，「アメリカという国はとるに足りないくらいわずかの上流階級と少数の無産階級とをもって生れ出るという廻り合せ」になっていて，「1776年には実際に身分と階級の制度があったが，アメリカの社会革命はそれをすっかりたたきこわす役割をはたした」とか，独立戦争の結果「上層階級はすっかり勢力を失った」(傍点

22) 第1節で触れた1956年の西洋史学会大会のアメリカ史部門の模様を論評した村本竹司氏は，そのときの報告者の一人である富田虎男氏の「トーマス・ジェファソンのヴァージニア改革の意義」における富田氏の規定——《上からの地主的改革》——を高く評価して，「氏が植民地の大邦ヴァージニアを分析してそのブルジョア革命たることを否定された意義は大きい」と述べ，つづけてそのときの他の報告者であった今津氏，武則氏，三浦氏のいずれの報告においても植民地全邦の改革が〈上から〉のそれであったことを示唆されていると考えることが出来ると思う。したがって，英帝国の権力を植民地から一帰した〈独立〉の側面を一応捨象して，植民地の社会構造との関連において〈アメリカ独立革命〉の基本的性格を規定すれば，《東部の(前期的)大商人・大土地所有者による上からの改革》とすることが出来るのではないだろうか」(「歴史学の成果と課題，アメリカ史」『歴史学研究』213号)と自己の見解を表明されている。村本氏のこのような見解は，その後氏がアメリカにおける市民革命の問題を，レーニンが『農業綱領』のなかで措定した，いわゆる《アメリカ型の道》の概念に照して展開された際，「このアメリカ型概念の内容に即していえば，独立革命ではなくて南北戦争こそがアメリカの市民革命である」(「アメリカ型の道と南北戦争」『歴史評論』103号)と言われるように，南北戦争へのこうした展望をもって表明されているのであるが，いずれにしても，アメリカ革命からその市民革命性を抹殺しようとする強い主張にわかりはない.

23) 小原敏士「アメリカ資本主義の歴史的背景の再吟味」『経済研究』11巻3号。同「大塚史学におけるアメリカ資本主義」『経済研究』12巻2号。

はいずれも本田)などと主張するマルクス主義的歴史家に少くとも私は接したことがない。もちろん，個々的な事例において，彼らが人民大衆の役割を強調するあまり結果として教授の言われる民主化論者の弊におちいっている場合がないとはいえないが，全体として彼らが意図したところは，それを過大に評価することではなく，十分かつ正当に評価しようとしたということである。

ここでブルジョア的ということと民主的ということの関連について一言しておく必要があるように思われる。というのは，従来われわれは，封建制から資本主義への過渡期の時期を対象として問題が論じられている場合に——意識的であれ無意識的であれ——ブルジョア的即民主的というニュアンスをもってこの表現がなされている例に屢々出合うことがあるからである。教授が「市民革命としての性格をあまりにも理念的に考えるあまりその民主主義的性質を過大に評価する云云……」と言われるのは，このことと無関係ではないであろう。しかし，以上のような用法も，つねに必ずしも間違いであるとはいえない。何故なら，社会の一定の発展段階においては，それ以前の旧勢力にたいしてブルジョアジーの利害が，のちにこれと真向から対立してプロレタリアートとしての独自の1階級を形成することになるそれより下の社会層の利害と，ある程度まで合致するような歴史的条件が現実に存在しえたからである。

この限りにおいて，ブルジョア民主主義は民主的でありえた。しかし，この場合にも重要なことは，それを可能ならしめた原動力がブルジョアジーそれ自身にではなく，それより下の社会層にあったということである。労働者階階級が未だ階級として成熟しておらず，そのため労働者が明確な階級意識をもつことが出来なかった時代に起ったアメリカのブルジョア革命は，したがってその民主的性格にもかかわらず，そこには自らはっきりとしたブルジョア的限界があったのである。それは，いわば《歴史的な制約》である。このことを認めれば，教授が言われるような《ゆきすぎた democratisation》の弊におちいることはないであろう。革命戦争中から戦後にかけて遂行されたアメリカの土地問題(イギリス王家や王党派の領地の没収。長子相続，限嗣相続，免役地代などの廃止をふくむ土地所有にかんする重要法律の制定。公有地の創出。土地の再分配……等)なかんずく没収地の再分配方法——売却による土地分配——にかんして，クロピヤトニク Г. П. Куропятник が，19世紀末頃までの「アメリカ農業における資本主義発展の道」について論じた論文のなかで言っている次の言葉はこの点で示唆的である。すなわち，彼は言う。「それは，もとより純粋にブルジョア的な土地分配方法であって，決して民主的なそれではなかった[24]」と。

第2の疑問点は，小原教授自身はアメリカにおける市民革命をどのように考えておられるのだろうかということである。すなわち，すでに明らかなように，教授は，アメリカ革命の市民革命的性格をきわめて控え目に評価されており，それは「たとえ市民革命の性質をもつものではあっても，まことに〈不完全〉で不十分な市民革命であったというほかはない」と言われるが，他方，南北戦争については，「いわんや南北戦争をもって奴隷の解放をその主な目的とし，また事実，奴隷解放を実現したところの〈解放戦争〉とみることは明らかに民主化過程の過大評価におちいるものである」と述べ，「奴隷制は，はたして資本主義にたいしてほんとに〈阻害的〉であったのだろうか」と真向から疑問を提出するかたちで，その市民革命性を完全に否定される[25]。

以上みられるような教授の発言から，一言でいえば，教授は，アメリカにおいては市民革命はきわめて不十分にしか——それもアメリカ革命においてのみ——遂行されなかったのだと考えておら

24) Г.П. Куропятник, "О пути развития капитализма в земледении США в домополистическую эпху." (Новая и новейшая история, No 4, 1958.)

25) アメリカ革命が現実に黒人奴隷制を解決しえず，また南北戦争後に再建期の「ヘイズ=ティルデンの妥協」を経て，それが前近代的なシェア・クローパー制度のもとに再編成されていったことはまぎれもない事実である。これらの問題をめぐる教授の発言にかんしては，私は別個にこれまでに自分の考えをある程度述べてきたし，今なお言うべきことは多くの残されているが，本論の主題からは逸脱するのでそれは別の機会に譲る。

れるようにみうけられる。そうだとすれば——すでに紙数が尽きているので立入った検討は行わないが——「市民革命としての性格をあまりにも理念的に考えすぎる」ことを極力戒められる教授自身が，「その民主主義的性質を過大に評価する」ことをおそれるあまり，それを過少に評価し，現実にアメリカにおける市民革命を軽視することによって，逆に「市民革命としての性格をあまりにも理念的に考えすぎる」結果に陥っておられはしないだろうか。理念型としての市民革命は現実に起ったそれとは，いかなる場合にも違う方が当り前であって，そういう意味では100パーセント完全な市民革命というようなものは現実にはありえないと考える[26]。しかし，だからといって，アメリカの場合，私にはそれを例えば日本やドイツなどの場合と同列——勿論，教授がそう言っておられるわけではないが——には考えられないのである。(1961・7・4)

26) 柴田三千雄氏は，「フランス革命論の再検討」と題して，ブルジョア革命の古典的形態といわれているフランス革命が果して《古典的形態》であったか，もしそうならそれは如何なる意味でそうなのかを問われている。(『歴史学研究』253号)